

# 外国の土木技術者

## 私の経験にみるわが国との差

### ① エジプト

檜垣陽一\*

夕暮れ迫る家族キャンプの広庭で手をつないだ7,8人の子供たちが、ヘフリージャコ・フリージャコ・ドレミープー……マダム・ジャンボノなどと、たわいのない童謡を歌いつつ、工事現場から帰ってくる父親を待っている。ロバが道端でアザミの葉を食っている。ケシの花がところどころ朱印を押したように咲いている。干上がったカームの河原を、ベトウインの牧童たちに率いられた100頭あまりの羊の群が、ザワザワと通りすぎていく。

リビアの首府、トリポリ市から地中海沿いに東へ170km進み、そこから内陸へ20kmほど入った半砂漠の中に、ワディカーム・プロジェクトがある。1969年の(First September)の革命で王政を廃したカダフィ議長

\* 正会員 (株) 建設企画コンサルタント開発室長

革命の一環として計画され、フィルタイプのダムで雨期の洪水を貯めて、約3000haの農地を灌漑し、一大コミュニティー・センターをつくらうというものである。コントラクターはエジプトのベヘラ社 (Societe Anonyme du Behera) で、わが社は1972年2月以来、ベヘラ社のアドバイザーとして、フィルダムと構造物の施工を指導している。筆者は50年の2月から51年の2月まで1年間、工事現場に滞在した。本文は最終年次の日本人チームのチーフである本間勝氏が、エジプト人技師たちにインタビューをしてくれた記事に基づく。

### 1. 土木技術者となる方法

エジプト本国内で技術屋になるコースは大体次のようである。日本と同じ6・3・3の最終年次、つまり高校3年で全国いっせいの大学入学資格試験があり、これに合格すると希望する大学と学部が選べる。工学部は5年制で1年目が教養課程、2年目から専門課程に入り、4年生と5年生の夏休みに実習が課せられる。修士課程は2年、博士課程はないからアメリカ合衆国、イギリス、ソビエトなどの国々の大学の博士課程に留学して学位をとる。大学卒の技師 (Engineer) の社会的地位は高い。高校卒の技師 (Sub-Engineer) との待遇の格差が大きい。建設現場の事務屋さんの比重は小さい。カイロ大学の法学部と神学部をダブルで卒業した男が現場の食堂の賄い方



本間勝氏夫人とエジプト人の家族たち

で、ブツ切りの牛肉の計量などしている。エンジニアの初任給は7号給で、通常、上司の考課表を参考にして所属団体のコミッティーの査定によって、2年おきに2号給までは順調にすすむようである。1号給に昇進する場合は関係大臣の承認がある。大プロジェクトの所長クラスがこれに相当する。さらに、この上に1'、1''の特別号給があり、大臣補佐官 (Assistant to minister) と呼ばれ、ベヘラ社の社長らがこれにあたる。

給与は、① 本社勤務の場合、各号の基本給+各号昇任後の経過年数に比例する追加給+技師手当+残業手当となっている。家族手当と住宅手当に相当するものはない。② 国内現場勤務の場合、①の残業手当の代わりに現場手当(基本給の40~60%)と現場ボーナスが加わる。③ 国外の現場勤務の場合、②+海外手当となる。ただし、現場手当がない。このほかに、年間2か月程度のボーナスが出る。

## 2. ナビール氏の生活

さて、ナビール氏は、本年36才、妻と2人の娘たちが工事現場の家族キャンプに同居している。アレキサンドリア大学工学部土木工学科を卒業後、ベヘラ社に入社、現在、ダムセクションのチーフ、すなわち盛立係長といった役どころである。1973年8月に一度辞表を出して、翌年2月までトリポリ市のコンサルタント会社で働いていた。身長190cmの、見るからに土木屋らしいこの男は、カムに転勤するおり、本国から家族を早期に呼びたいと思ったが、乗込みのドサクサにまぎれてなかなか呼んでもらえない。ベヘラ社を辞め、コンサルタントで優雅に構造図面などを描いているところに、辞を低くして慰留にこれらたベヘラ社の社長の説得に折れて復帰したわけである。彼は家族の意向によって、土木屋としての生活基盤を調整しようとするタイプだ。アラブ諸国の正月ともいべき断食月(ラマダン)の後では、有給休暇をタツブリと取って、家族とともにエジプトにサッサ

と帰る。給与は4号給で、42リビア・ディナール(L.D.)、海外手当が150L.D.、現場ボーナスが毎月45L.D.程度で合計237L.D.、日本円になおすと23万7000円の月俸、その他に半年おきのボーナスが200L.D.になるから、年俸約325万円、中堅社員の海外現場における標準的な所得と考えてよい。

## 3. ムスタファ氏的生活

ムスタファ氏は1943年生まれ、妻と9才の息子、5才の娘がある。現場には単身赴任。1965年に、ミニア的高等工業研究所機械工学科を卒業した。ナビール氏と同じ号給を取っているが、月に1万5000円の食事費補助と、半年に一度の帰国が認められていて、航空券が支給される。もともとワークショップの主任であったが、カームの後段階では、スピルウェイの発破掘削を担当している。土木屋の領分に興味があって、細かな施工計画書をつくり、日本人チームのオフィスに現われて、評定してくれという。赤鉛筆で三重丸をつけて「素晴らしいじゃないか!」と賞賛すると、故ナセル大統領のような風貌をほころばせて意気揚々と引きあげる。彼は言う。「私の家族をこういう無味乾燥の工事現場に連れてこようとは思わない。家族が可哀想ではないか。七面倒な家族キャンプのお付き合いもご免だ」。もともと彼の仲間たちは「なあに、あれで本音はチョンガー生活を楽しんでいるのさ」と笑う。

## 4. フィキ氏の生活

フィキ氏は、同じく4号給のカイロ大学を卒業した土木屋だが、コンクリート、型枠、埋設工などを担当している。構造物係長といったところか。10人兄弟の長男とかで、弟たちの面倒をみるために、高校を卒業後、しばらく働いていたようだ。苦勞人らしく如才がない。金曜の休日には、たいてい鶏肉などをぶら下げて、土方飯場を訪ねる。世話役連中が彼を囲んで、ワイワイとおだ

الجميع اليمين الخسيسه البيا بانيه  
 يكون اليمين الخسيسه بانيه  
 رنا صبح الشريه . حبه بعتم السلام  
 على العالم  
 خيسه بانيه  
 خيسه بانيه

ムスタファ氏のメッセージ

انوجه الى زملائي الهندسة اليابانية بالبريد بطلب  
 من مجلة ربيع الهندسة بالبريد. وانتم هم خالد قنات  
 كهنيسه بنبيه اسيرا جهم لرماد رستم طيب  
 مصر سنملاو سنازتهم لنا ان سناز الهندسة  
 بالبريد ذات الطابع العالميه. وشكره جدا يزار  
 با سناز سنازنا بمرجع المل  
 مع اطيب تحياتي والسلام عليكم ورحمة الله وبركاته  
 نبيل  
 نبيل

ナビール氏のメッセージ

上げています。ただ、この名だたるイスラム教の国は禁酒国であるから、酒が手に入らない。酒の代わりにシャイ(紅茶)を飲む。飲めば歌って踊る。カイロのベリーダンスはセクシーで楽しいが、髭面の男たちのそれはグロテスクである。

フィキ氏のアシスタント・エンジニアは大学卒業後1年目、つまり7号給の多感な青年だが、彼はこのプロジェクト現場を Open Jail (開かれた牢獄) にたとえる。半年ごとの、カイロの恋人に会える日を指折り数えて待っている。索漠たる不毛の地に、土木屋1年目を過ごす彼は、ナイル河の滔々たる緑の水の流れへの郷愁と、若さ特有の繊細な情感などがさくそうして、定期的に躁と鬱の状態を繰り返している。

5. 日本の皆さまへ

さて、最後に本誌のこの企画に対して、ナビール氏とムスタファ氏がメッセージを寄せてくれた。紹介しよう。ナビール氏のそれは「日本の技術屋の方々へ。私は土木屋として、大規模な国外現場で働くことによって祖国に寄与する喜びをかみしめている。それにも増して、わが愛する妻と子が、ともにここにあることによって、その喜びを増してくれる」といった意味だ。ムスタファ氏のものは「すべての日本の技術者の皆さまへ。世界中の人びとの進歩と平和のために奮闘しようではないか」といった意味である。このロマンチストで、熱烈なイスラム教の信奉者は、スビルウェイのクローラードリルのせん孔音の中で、日本人にコーランの詩句を説いたものだ。そしてその説教の最後には、いつでも溜息まじりに「ムスリムの本質は、あなたには、結局のところわからないだろう。なぜなら、あなたは詩人ではないからだ」と結ぶのである。日本人はつぶやいた。「そうだろう。それでケッコウさ。しかしそれでも、砂漠には日本の演歌がよく似合うよ」。

② フランス
町井旦昌*

3人のフランス人鉄道土木屋のことを書いてみたい。フランス人は鉄道員のことを“シュミノール”という愛称で呼んで独特の雰囲気表現するが、その土木屋にも一種独特の味わいがあった。

ボルセイ氏とモンターニェ君は、フランス国鉄のエンジニア、ヴノー氏は国鉄から海外技術援助のためにザイール共和国に派遣されているエンジニアだ。

1. ボルセイ氏のこと

1968年5月。パリの東南 235 km にあるヌベールでボルセイ氏に会った。ヌベールは人口4万人程度の中都市で、10世紀ころの教会やカテドラルが残っている落ち着いたたずまいの街であった。ロアール河沿いのマロニエの大樹が白と紅の花をつけていたところで、フランスの保線を実地に見学するために、はるばる彼を訪ねてやってきた。

ボルセイ氏はこの街にある国鉄事務所の保線主任である。長身、柔和な笑顔を絶やさない40才ぐらゐのエンジニアで、職業学校で土木を勉強し卒業してからは、ずっとこの付近の現場を渡り歩いてきたという。ゆっくりとわかり易いフランス語で保線現場の仕事の流れから仕事の一つ一つに至るまで細かい数字を使って説明しおえると「さて」と彼は言った。

「保線の技術はすべて現場にあります。現場、しかも職人の腕と道具にそのすべてが集められています。ムッシュー・マチイ」。

自らルノー 16 のハンドルを握り保線の現場を回る。気軽に差し出す手に、線路工手は手が汚れているので、手を出すかわりに腕を差し出し親しみをこめた握手を交わす。「これがカナブール。あなたもやってみますか？ 浮きまくらぎ(ダンスーズ、つまり「踊り子」とフランス語でいう)発見器です」。次々と知恵のかたまりのような道具を見せてくれる。

あるとき、車の中で線路の横抵抗力の話をしたことがあった。私がすっかり忘れていかけた1週間ほど経

\* 国鉄施設局保線課補佐